

# The Unknown Lovers

Hasebe Namie

長谷部奈美江



midnight press

# The Unknown Covers

Hasebe Nami

ハセベ ナミ

江苏工业学院图书馆  
藏书章



midnight press

**The Unknown Lovers**

2001年9月25日発行

著者 長谷部奈美江

装丁 土田省三

発行者 岡田幸文

発行所 ミッドナイト・プレス

東京都板橋区成増2-33-11

ハイム K & T 103

電話03(5968)3905

振替00180-7-255834

発売元 星雲社

東京都文京区大塚3-21-10

電話03(3947)1021

組版 ミッドナイト・ワークーズ

印刷・製本 平河工業社

©2001 Hasebe Namie

## 目次

|                |    |
|----------------|----|
| 驟雨の後の          | 6  |
| アラバマ猫          | 8  |
| 窓際の一分          | 12 |
| ニューヨークの雨       | 16 |
| 次の親子           | 20 |
| 片腕の時間          | 24 |
| 夜の計測           | 28 |
| 摂氏二度           | 36 |
| 一九九九・七・七       | 38 |
| 手              | 40 |
| あした、新しい服ができてくる |    |
| 六月の顔           | 48 |
|                | 44 |

路上で 52

恵 56

白い帽子 60

橋を渡る 68

もっと古い家で会えばよかった 72

いつからいないのだろう 76

感謝することはできなくとも 80

天降り来むものならなくに 84

間違いをおぼえたように眠くなる 88

いつかそこにいる友だち 90

北京の海水浴 94

35ミリのお花畑 98



## The Unknown Lovers

## 驟雨の後の

女のひとが死んでいた

そこらじゅういっぱい夏の繁みの中で

光って死んでいた

昼間野球のボールがごろりとやってきた時も

少年たちの声を吸い上げるだけだったのに

わたしが逃げてくると

その目を開けてじつと光っていてくれた

借金取りの声が

近くまでやってきて

死んだひとに胸の鼓動が乗り移ってゆく

一雨来たのがうそのように

死んだひとのワンピースはふわふわとして濡れておらず  
からだからはいい匂いがして

盆踊りの帰りのようだった

「女だぞ、けっこういい玉なんだ」

借金取りの声はしつこかったが

塩ブリの味がいつも違うかぶらずしのことなど思い出し

わたしよりきれいなひとだなと思った

死体と競ってみてもしかたないが

きつと浴衣が似合っただろう

## アラバマ猫

ぼくの布団の

二匹の西蔵猫は

ぼくがかつてアラバマで捨て

今度新しい妻と一緒に飛行機で帰ってきた

新しい妻の猫になった彼らは

痩せてはいたが

ベイブリッジを見るホテルマンの顔になっていた

いったいどこでそんなものを身につけてきたものか

長い外国暮らしのせいなのか

ばくの新しい妻は結婚前

仕事帰りに二、三度売春したことがあるらしいので  
ちよつとした出来事から

猫も変わってしまうことがあるのかもしれない

「あの頃のわたしはとでもすすんでいたのよ」

とは妻は言わない

たぶん西藏猫だって言わない

捨てられたのは捨てられるだけの理由があるからで

ばくの一方的な身勝手からではないが

思い出したくない過去を

いまさら蒸し返すつもりもない

彼らは妻の猫である

ぼくは今では大の猫嫌いだが

妻の大事な猫を捨てることはない

けれども十月になり

部屋が思いがけず湿っていると

額の傷がうずき出し

つい西蔵猫の悪口を口走ってしまうことがある

そんな時彼らはどこかへ行ってしまうが

方々を探しまわらなくても

廃屋の駅舎の奥に座り込んでいる



## 窓際の一分

むかしの席の男のひとはタイ料理を食べながら  
わたしのことを幸子だとか知美だとか  
悪ふざけではなくて

「いいお天気だね」っていった次には  
男のひとにとってわたしは幸子ではなくなり  
知美や靖子になっているのだ

病気という言葉を使えば簡単だけど  
男のひとはむかしはわたしの恋人で

いまだってその面影がある

広島の街の空気を吸えば少しはよくなるか

とも思ったけれど

窓の外を白い遊覧船が流れてゆくだけで

タイ料理がおいしい

しばらく心配そうに

わたしたちの方を見ていた男のひとの母親は

コーヒーを飲むことにしたようだ

知美にしても靖子にしても

男のひとの記憶にある女のひとで

年齢も関係もドレスの色もわたしにはわからない

でも男のひとはいいい血色をしている

だって今でもコンピュータの修理なら天下一品なもの

なんでこわれちゃったのかな

わたしが他の男のひとを好きになっちゃったからかな  
そんなのはしょっている考え方で

原因はアンナさんかもしれないし

上司や同僚もしくはアクシデントのせいかもしれない  
食事がきれて

わたしが一人だけ知っている女のひとの名前をいうと  
一分間だけ話が通じた